鴻原記

地

珍本

特
リ 5
4756
2

特
リ5
4766
2

鴻原記巻中目録

一　吉利与丹後鴻子へ取懸る事
　　付　和泉合戦の事
二　唐津勢富岡竜城の事
　　付　郷人等富岡の城再攻の事
三　鴻原天竺丸使黨為退治諸勢押向事
　　付　一揆郷人等原城へ籠竜人数を記事
　　十二月廿日原の城一番攻の事

黒川女道蔵書
黒川真道
昭和
永耀

鴻原記巻第中

一　長利与丹後守鴻子之懸事
　　并
　　中波合戦之事

かゝしとゝ波よ中波ハ郷八幡宮時鳥こやゝりひく
ひそうに一きうふぢうちんしうりくれ給かう
つられきりしたん等ぢとより請有ハ者こゝろとふ
まいぢ式より鴻原へ行ぐるかおよりゆ味方小勢
ありやゝ也鴻子中波ハ軍勢とぢけちうさんらゆ
くびをめくらしゝへうゝ次うて十一月十三日す
てふ鴻子りんうへよりちんとしきりしがうふハ
日柄ようゝ次をて翌日十四日そうちんよりをを

しよせんとそのヒヒしをくらまりぬかゝゆこ
ゝ為ゆ為為原大江ゆうちゆうちやうゆ
ゆせ一一きとを唐津勢わま者退治ゆまり
ゆうとゆゆゆそうゆゆゆ者とをきぎつ
くをゝゆするくをものゝきいくく長崎へけて
ぶそけひやうゆゆやうをきゝゝをきゝゆゆゆ
わまま者へをゝよ勢ゆゆゆゆ為ゆ為代ゝまを
とけをゆりどゆくめゆゆさきへをををひんと
ほ島附員めんゆ為五千ゆまひきつまくゆ為も
ゆゆりのゆゆわまま者かせいよをゝゝりまけ
ゆ津浦よあきゆりくゝとれやゝを受ゆれゆ
附員農よよせんとをくくとよゝをいふ為きいく
よきゆりゆゆゆきゆゆりゆ清沢人数ゆゆゆ分ゆ
をきゝゆゆゆゆとゆゆゆゆゆとべきとゆゆゆりひよ
ゆきゆゆりゆゆゆれゆを公ゆゆ兵道けゝとゆよ兵勝の
術ゆひそゆよ敵陣ゆきゆけゝゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆその利よのゆくゆくゆその不意をゆてとゆゆ
ゆくゆと夜深更よゆゆんで海内ゆ為為為ゆゆくく
へひそゆゆ人数をゆゆよせ来ゆよ鴻ゆへゆりけん
ゆまよまゆ為原方ゆ者をゆゆ為ゆくゆゆゆゆ
ゆりゆゆへゆゆ者人数へゆまゆゆゆ押よせ海
陰けゆ勢一文よゆけとゆきけゆゆをけゆけ
ぜんごをけくくせゆゆけゆけゆ事ゆゆゆゆゆゆゆ
ゆ勢遠をゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

源ノ義経ノ軍勝軍あるんぞのくいみくいふ
れべみかりけともとく同じ。その事ハ鴻原方
はげうめんのみかふふぜくれるぎこみがんこうもあ。
さるりくふ。そこ夜もわはげくこみるりしりん。是
今ところてのへをのくさこめあいくうお畠うまこば
海まへへ治承はこたうら。山まいこくわれぐうめん
ども。ごくりこと中みを十二日ものこ夜とこめて押
寄さり。鴻ノ原軍勢ハのりとりがう人原とた
うひかどう。敵ノ世ちんとハ田をおりと源宣
てこうのありたくハ。ハぐくり勢れお陣をはこ
へきぐふはくをもをらきりあんとゆぐんれや
ぜこそふくあれこうまどもるいくのうこんん

かうへの山ノ上ノ人見の者ハあのくちがんこうう
れ原ノ原がうせんとやうと見ればいそこぐ。ち
うもんいこせとて五六人ハ引あきくりくるも
とこ様みまん原りくこと。こ海れ者ハくわりしに
こうりあ。ふちうくん。ハいそぐべき。家こうこう
やうちとれ。物語かどぐ。う屋ノ勢ちい優寝の
まこさまとぐまくこと云きうせとてあ夜浅三
ありし時。これこうの原つぐくちこうへり。只とてき
家ちとかくおはしてもまんぎれ中より。ひこう
白ぐうあびぐくちこう見えてはいそきまつか
波の方へひきこうこ勢ハ。何きこ御一不ゆく
御ぜこまこべくはしいひそれぐこ宅蔵おあ

ちかきあたりまで漕ぎ出でぬれば、敵とのるハうれしく
おもへども、なほ、たかよりよりかよ馬鹿臭とぴーめく
こゝ漕ぎよせたるや一撰の角つぶらう、れ山のり
鴻の巣の口、大蟒のきもへ。五六度まこと間を
ちしよりかくれバ海まよりハ漕ぎ出でくうた
あまひさくこゝ漕ぎさき。これと五度ようちあぐ
見ぬ。ぶくれ一き。一同ハ時のこゝをあげられば
陸地をちんぞうし。ひくこゝ漕ぎこゝへ
一きとものきくこゝ。ハ雑働の書の者ともと。
ちこれ蛇よさまとへ。白布のもゝ白紙のれ
ぶりとぴいふもう漕ぐこゝらへくうのあんぞう
れ屋ものもうし漕ぎよさ。せ。尼花よりもせ

ぶりまま人ものこゝ三りん漕ぐぞさ。野ぶ漕
ものるる山海へむハ編まみを敵ともこゝとあらべ。あん
まんさとも見へものこゝ沢こゝうあぶくぶくもあこと
にもよ天のあ中ハ二ば。鉛やけのきりまぐ
らこゝ中ものぶんのせいきどきこゝあげ
ものぶ。鉛きとも中りくまにおよハざり
ものぶりくものりわひ法の事あまば。こゝ漕れ
ぶりんぞもでお家屋よ火をうけ。ものぶりく
蛇ハ中こゝ屋けものこゝとものや。酒屋う野い
の者どもハ屋良ぶげよ漕ぐぶりものこゝらき
あ。ものぶ。年波のかまひぶりこゝぶ。中
ものこゝあうべきとて。西の方へこゝみちく

あねりつもりうんぐるかぬんしゐあくし。敵の
情をバ知る地形のけんそんしより始の
なれば民家はけかあてなまいぐんらかハぬもつて
とりのもうれども。大將之宅前右衛門ハいくハぢう
きそんかんどの方へもやはひきそうそくかやぐ
もかの軍兵八郎がごまれそれバせんうこかや
そんを高れ言山よりもとりあうりもとくに方へ後
ゆをあはうりくらとうぞきこへ。氏竜山ハのけ
ぬんかいうのふべきとこ海あくハあう孫もまま
こそれはよハ高んをやきそうしたよ姫
けどもあうのけのひくこうわさ海
くれやまどもその中ハ。林又右衛門ありとハ小平

高中

島。大野助左衛門。これらを人ハまひがくをもちう
ふもん。ゆは勢一きれを中ハくもがーさくく
あくうひ。吉利より冊の屏りむくを六七人ハ付
しがどう勢いをけぐあせいよぶせいもて
さうがうかんをてつハうれよまかくそのもく
そこかくうう死とそかの者ともハ働事とハ
云かくう。義経左衛より逃らつて敵徒よおもてとな
ゆせあうひぬらハふうりう寺澤方の軍勢七
余人うきをくるきうしんの屏りむくしとうで
めちんうせんよかといくきとうふぐそのもく
勝とさけてうけいざやこのきあひかくを海
のぐんよかしせんかのもかひのもうりもこれ

うり二里ばかりあまばとりうら塩をひさぐもの
屋もとむかをるへ波をそのほめくそかうら
ゐうら。されば三宅なる人つやうりよひさをうて。
柳のせくどうらまうり澤まよまうくせよし
と云。それ〳〵しこうてあくまく一戦といはりへども
小勢よりて中りく勝利をうべしとあ波べとまつ年
波ようけうこをりいばまをゆうんもべきよこれ
やくとをきうせおまこあくひさうけ。一きのやう
むらうとりを迫捕せんゆ屋とうゆべ。家
しをうりきやうけさくへ場をまこども同よあま
つまぬうらうらうりうんよ家うるゆあまこ分。二そ
を勝利ハをうう。民敵と半途ゆ防禦せど。
りとかいくさ利をべ。ふくれうくさひ屋く
ありう。さきあくまいりとあふべ。とのひとそくそ
うをりそまこ澤未七郎を防ハりくようりいの
すあまこばらうちうりもと近すておひかまへく
うくこ宅がうとハうを。勝利ハ多少
おようバうう。家とるを敗禦ときうもべ。それ侍
の一ゆくのぞむハけうをふるりう。民くあうこれか
勢あくおゆむ大軍よりうちうこハ日年一ゆ高名
をうり若利ゆ冊ゆん屋つむうあうどあ近よ
せうりとてを。沼末があひげをゆうく。一郎うり
まんとうりみうてよちうてうむうをうありへ世
きうあうをいひうあ五十よこれ若を

を。屋ぶうげへさうりとひきくしぶちまはりうへ
つゝ居らうりしぶとでよろうけまう勢い。
いさこそんでとさきる。沢まはう
見ろうりを。時分を右とやおりひろん。六輪乃
十は慶長鐐のいんハ家ありと。いきむぢろう
をちうゝあゝ。一文ふろいとをうゝて。家を
せんどくうゝをくれバぢ矢ハ一つとあるれど
をもげうてつもうれるまハ大
物のそとうしもとうゝをくぐけしさか
くうつてけむうゝを物ともせぶうゝ者
をバ時ゝうへあをゝ。あめきさけんでかゝりあ
まぶ。沢本をちうしさへ〳〵ぶ。ふ敷ふかはをうを
ふへきやうあゝかれば二十ふさかどうゝまて
本渡をうゝをひろさとりぬうゝあんの家
をゝゝ沢ゝけくいゝ遍ゝゝ。りんど在鉄
ぐうふんどもぶゝと見ゝりをぬく
あひつけるあまねてゝよ家屋る火をうけ
てせんごさいうをとうゝをみ時をむしをあ
ちゝれべ寺沢方れぐんせいあんをさういの
裏切あまぶ中りゝ一戦あもとゝバぶ。墨落原
田のお豆原。沢本あんどを姫ゝゝて。太刀物具を
あいとあと表みとゝぶとりゝ。墨の方へひ
きとりぬおりゝ。墨落をゝゝ。柳本みゝ表夢をいひあ

まする事ありとて。そもそものごせい。なんぢに
きこうあひさいもひあらはるれとぜんこ
の敵あわうまきたく。れうもみか富貴の城忍
ひさよろうさうれもも中ふこ宅藤兵衛。佃
八郎兵衛。并河九兵衛。吉末勘右衛門。伊ゝかた兵衛門を
云一者。伊勢路入へ。あくうこまりあくかいしが
分うされちいぐんをこて。いげくまくひくへきぞ
入へせくといさもまてぐ。色いぐんのあびくせ
あまこ山前ちんうへさうんとそれども後ぐんすと
ものぶ。五ハ親をもて。京伊ハ主をしぶして
まれちかとあひけれが大力ある者ハ刀を
まこのこと者ハ矢をしぶ見うこ

いのちをすてたうぐくへしてあちかろうそ
いれしそうの中よ三宅。并河。佃。吉末。伊ゝハ四こぐく
まうて五人一心よ同してよせうろうこう二十よ人ぐの
下ハ行さ者。大勢いを見ても。強勇ありしその
外ハこぐひもくるくきうへろ。ちりとハいへども。けふ大
将の吉利ち冊ぜんご左右をうこうみよりつぐく
せめくれが食脱のひあるもあくぶしておいふ五人共
よ一きれてうむうかわうこれて。宣死のあとこそあまれ
うまこ大将ゆうくんのているまぐうがくそういる成りつく。
ぶのうどんのさうふぶとまのみぜいあるひ切ろ屋敷ぐう。
萬よ人をしよをれがふ。あよ者ハ氏ぶ勝利をうべ
とハ見へざりそう

二

唐津勢富田城を攻事
付富田城を徒黨忠勇義政事

さてかとおぐうんどもその日八兩のとりりけるみな
ひうまつとさて又時日うくふけの富田へハ遣てらゆ
うぶみふくかく渡り陳らりぬやてその日富田へ
して籠人數ぶ川田鴻次郎左衛門同くしち左衛門
原田伊藤ち大竹加兵衛稲田平左衛門浅井卜菴
三宅右衛門澤木七郎兵衛田十郎左衛門ちうう
頭ハ角若左衛門國枝治左衛門小笠
原紋助そのさかひ十七人富田の城へとりこ
もりよりうぶいうまへく長ちりくち富田鴻三宅原

田子城門ちよとの下知をあせてときこへくるか。
城とや色ぶんるいせそ〜と。雑ども。よろかい世ゐるきこへくるまくに〜こそ城門う。大石火矢の大てつもうを矢ざまくまとけられぞうう人れ角のもう。何万ぎようせうとそあつべこそ城といはんへぐりくるさるるこそ人どもうちよりてはせんぎまなは城ゐあくうちもてあそてハせんをあ。りくりうれ軍勢よまるこれをはんせあるこぬのまぐあくびやううあさめぬまにいざや富岡の城へ押よせてこめぐ一攻よせあをとう。わま茅中をたるぐへくぞこそおうを分方れ紙ゐ紙よりりんとこくうをの〜議定〜

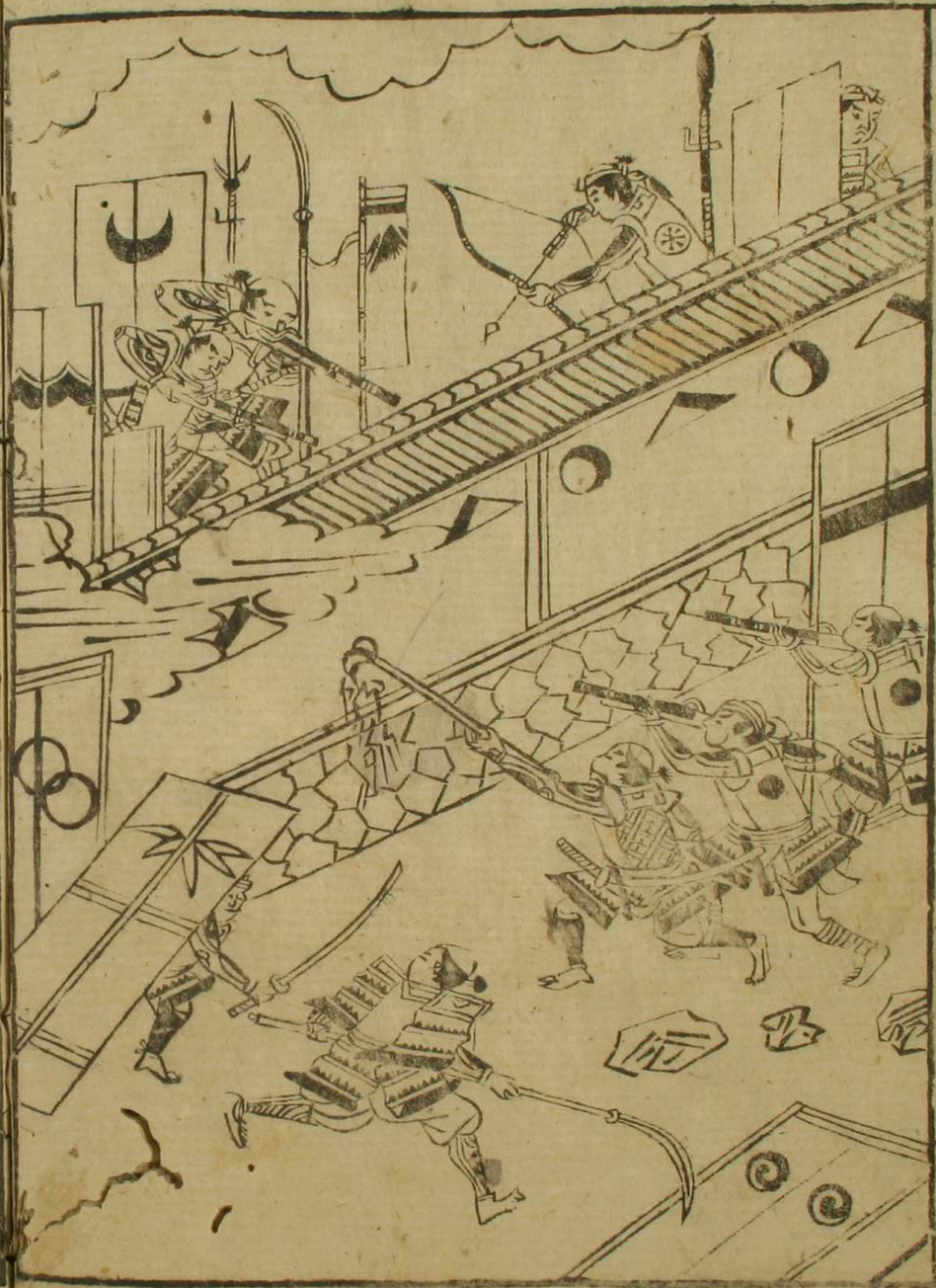
同き十八日表利長ゐ冊の角川むこう。一万よりこあくあく。富岡まてバ分ぶ。城より一里角ぐそ。四郷といひ〜わまで八数をこうハとーるぐ。伴ぢん白たこ白のぐりと数千本さ〜ぢ孫人数ぞろへをーきりくれば。富岡ゐ城より一里角ぐて見へこうていハあるそこ二三万をこうんこそそんへよくこそ。富岡へよせんとなりひーぐ人数ゐていをかのみ分くぐ。ぐあくこうハひさふこくこ。ちうみ依て富岡籠城ゐ人くこそ。富をしぞこめて夜ぐけわやせんぢくんと。用心をこそこうふさハるくして。翌日十九日ぢあこうより吉利ゐ冊の角川ちこ。こみとこ城へをーこをぞ。

十九

そんとしみこそ。家をとりこぼせあけまども
城門ゐるものてつたうしたきまわりせどう城ん
きが集蠻はごときよせてどもちやうぎだと
しをとろぶとく。二百余人。斤はあいわいざう
うさまりぞうけ者どもも角てをうふもをを
やありひろん。強て城をとせあげしてそのまく
じんをひきにろ。城門はへ一戦よかをを
いよいよちんごるようどんとさうかとよ国帰
時負。うう人原を近年よりてはかりのが城
ゐんどをかこれはとれ人数めてせあるくさむこ
てををうう移はくこれをあんとかよ拍き
てとも用意せ源氏うりくとせんうけて。味方
姫くはまりけをゐ。敵よ敵利をおさせられと義
を勝負深沉は合戦る稜ばそうせめせんせ城生
とゐ。一万二千はちやくたう付ぶらごてういぶ
て用意して同き二十一日ぶ東雲ひうぎは
ゐ。又富国をうりうごこ。一度よ魍魎地をうごう。
奥つとんのつとく押よせて死まくくハ暴天生て
ハ家ととをのは城をるりわやのが家ゐるは初ん
ぶ西をとゐへ。て作ゐ面をはきかぶ。ぶうる
仏者をばいをこへくせあうるぶりひ切ゐるは
たくさゐれバ城門はへくもふせぶうはくは
こんりかてとうは負つをを藤をよりみこそはハ
三は九をぶを一度ハ二は九をぶを一度ハ二は九をぶを一度ハ二は九をぶを一度ハ

氷湖と畑ひとつとなりぬ。されども城門は人ぐ
いごのくるくるきたりてありく。花を供節よりあら
そひ。よ下一同一心して。中九もんごうあり。ら
しぶ。ぶ〳〵。三宅右衛門。よういをやしくら
ぬん。ろうきやうれ弓の射をどもど矢夫おびさ
きしういけれが。ものまねてうらいさかく
けく。ぶきうぎ決して作ねどをうくくや
けくきばかるふべきやうわるどてらはそ
てあぐゆをばてつきうれよどもどきまあ
らやぶうりぐに。稲麻竹圍れどくををを
きりと一きどもの。よ百よきさりぐうれきば。
さうを勇家れ人をうるふべきやうわるぶ

を見ぬ城どろぶ。ぶ。ぶ。



三、鴻原天満宮ノ従堂黒雲ノ為ニ退散諸勝相向事

付一揆ノ輩人数ヲ原城ヘ籠竜人数ヲ記事

斯ノ如ク小ト使ラヒて板倉内膳石谷十左両人ノ者ノ
談ヲ家て肥前鴻原へ下向ノ所ノ意趣ハ公儀ノ為
ノ人数一揆ノ有ひとりとて寺松
倉ノ寺澤ノ奪飲恣政ノ所ノ
ら冊ノ書きとゞめるべし
やうノ所ノ所ノ所ノ
ぐむひらる意とてんへ
ふるひくそのあるし
おもれる ばゝ路と

海西川かくらさこうれ屋つ
ぐ〜と使へ指むうふまぐ
ちやうさしてひとへ一きれい波をあ長せり
ふ分ふ依くあ上使肥前海原松倉ぐ城へちや
くらんありかくて鎮和の御めぜ豊後肥内
ふ長住あう牧野信義松平神之助殿秋冊波寺
又そのくろ長濱内匠頭代ありし馬場三之助殿
左衛つとどの〜駿艇鞭掉ふく高来城へ
うせありまりつるやう使れりもと兼知して岩
きもとう会せんぎあうかふさくろう在江戸
里し。鴻原此所守松倉長門守勝家ふま若狭頭
出羽沢兵庫頭忠高あんも給知れ一揆募重旨
とふ洋くらつ〜御聞徐りく夜を日よ波りくとの
くなふへ陥滅せむしさてもこう度れ鎮定ふは
軍勢とま称ふこうせ一揆れ無りだ。何いだう
乃ていとふのうせばうくうの原りぐ〜あ〜へ、
ねがうさんふぐくうせざ御りんぐ〜それあを
ぬど海うぐ自業自得果をま称ふるぐちう
ふ。ふくうむ〜。一そまま運様をそあ〜ともり
べ〜ゆきふのく〜きらやく一同して。うんこうれ人
数をこてまのうれうち同あれるまは
鍋鴻人数をこふ速鴻原へ三西つぐんこべとと
ぐうも〜。又きんまんるれ。鎮後西藏れ軍勢

もぬきりと松倉が城へ陣をすゑ
ゐるべし鴻巣へもちろん沢山勢ぞろひ
ちらゆく道さきふさしされハ細川越中守忠利
ハ人数をあま岩へいるさきをべしとちらちん
はあもむきさきりそく江戸へ飛脚をもつて
てきうあいはらまはりの意を屋もんせんと
の書をとしらきこへちらかる肥前詰道
寺八城守鍋鴻伝加ハ武蔵江戸さんさんよ
ぶくちやく男紀伊守ちゑ沢男甲斐守直澄一
万五千よへ引率し同ゑ鴻巣へちりくりあつさて
後後又ゑ来て城守ゑ玄蕃允豊氏も在江戸
ゐるもうるを迎ゑ慰兵部大輔忠豊八千余人を
多くく鴻巣へ引率ゑ薄ゑ同ゑ物川九城守ゑ花飛
薄ゑ長政足も在江戸ゑり急ハ猶ゑ尤近忠義
五千余人を引率し武蔵へ入りうあり
さて又肥後九軍勢ハ綱川翁中守忠利父子ハ
ふられ又江戸在勤ゑ後ゑ家長岡佐渡守ゑ
頼母佐ゑ人一万余人ひきはらくあま岩ゑ
てへ薄ゑ加ゑ沢ゑ後ゑ岩ゑ領守ゑ手澤
兵庫頭忠高ハ居城ゑ後ゑ勢を
ゑ出ゑ八ゑ海城ゑ在ゑ勢を
ゑ電城せ一ゑ八百余人をひきぐし
あま岩ゑ出ゑ船ゑ同ゑ軍事ゑ
牧野傳蔵松平神ゑ帰ゑ林丹波守ゑ武三人ゑ

へしまくみ細川越中守忠利ならびに肥後守
光利ゆまつ初業ハ姫より歳義西御ちきりく
在位まて。ちゆ十八歳ときこえしゆ。肥後西人数
あまた参りくまひうれより。岩本つ。御眼
と詠ひ。肥を日ゆ法いぐく肥後ハ西へまセちり
一方ときとり幸。十二月六日ハ見をあまの参ゆ
をそとへゆ源ゆ。法ち国ゆあま参中ハちくう
どもゆ。ハゆ。とちくうへきくかるゆ。恩慮仕
ちんちう相もちゆへどゆ船ともよちり参く
ことづく鴻原西あげまちう。一参ゆ。
ゆきちへちう。ちかゆ細川の先後ハ軍勢ちく
ひ。ゆ沢西勢ちくあまゆ参中を民地ものこ

こ沢ちいそちうちよゆきこへ。ちりきく参
ちちちれがちう一人を居ちりちちちよ後て
細川光利ゆあま参ちく
ちひきちう。ゆを宮して。ゆ玉川房ハ津
へゆんしゆとを一人ま鴻原加勢ちりくを
のそこちゆくきこへちりさてゆあま参ゆ使
三人ゆちこ馬乃浦へをしまちと桜ちう石岩西
人ちくちちちちくきこへ。さそを鴻原天
草西ハ一揆参。西鴻の所ちゆひよちん西
乃諸軍勢。吉利ちゆ冊誅後ちくりハちうを
きくに陣を姫一揆乃頭前参。ゆきちゆちう後
ハまのちゆくちゆんしゆあちゆ勝利西ハ

とうまつ。されば奥くれ都ゐ馬けうしゐ
乃城ハひとしうの名をなし。城天守ゆ一ゐ
一城ハ和きんせいの法式しるゐ依くかの城
ちるくしていまへもや。朝鮮乃ちうの
やうり。ちうれどもうういちにともむて
りうきうゆ渡ぱちやうゐ竜ゐばちんせいいさて
ゐさ。天守ハ御お馬ーうりとうゐとも。城中り
報来鉦鼓ハきせ。城ゐ城ゐひとゐ。そ
の上へ天帝をせるる勧慶ーまんしの竜
ゐきハ勝利をうべきまゐ事ゐゐ。海の中ゐ
かの城を十二月朔日ゆり千日中ゐ城中著
鼓をきーハ。ふしうくゐみんしゐ西服来ゐ
ゐ天のうりゐ。ゐ。ゐくとそきうへーかのもうれ
ゐ。ハ二方ハ海ゆりんくーとそーくさーノ解
風をうて。きうーゐ。きれゐんそゐまこば船をも
すゐるさやうにるるうりまひまわうきれゐく
ゐゐり。二方ハ入さーにくそーくうーそ。の下ゐ
ゐまゐり城れそうゐまゐりゆ而余町をゐんん
その。ゐ数千ハせいきをうてゐーべーが風り
ひうぐゐ月くゐひくけーきれ秋ハ野ゐをた
ゐぐとへゐーくゐ。ぱうて築地をゐくはき
さ海をひりさうりきをひいくまちうけれ
ばゐよりくゐ。ゐるりとそをりやとくゐ
とべきーくハ田んへさうゐ。城中ゐはくうき

やうれんらう。二万余人を和歌浦に集め、
屋敷もつ一万六千余。都合三万六千余人こそ
きて西。原は城掘大将より仰付られ、人夫領させ
わまま者ゆゑ、人夫付と号して、千九百
ちやう用とおのくくこゝろもとる者どもよハ。芦
深忠右衛門。浜邊伝左衛門。赤星主膳。馬場休以
會津家中。同く右京毛利平左衛門。林七左衛門
松作助右衛門。三宅沢島右衛門。久田七郎右衛門
素和村休澤。竹田木公郎。はた十三人ハ。竜城ならう
人衆として。諸民衆用し。阿貞同座よりさるゝ
て。御懸の者。とゝてきこゝろ人ゝ。ゝ。城中ゝ
ゝ。大將。山田右門作。大浦左衛門。働民二千

余人。ゝ。ゝ。中九村ハ。持ハ。ゝ。二万九千
農ハ頭。前ハ。千東長右衛門。同三平。
戸鴻。掘右衛門。ハ人五千二百。ゝ。ゝ。二九
ゝ。ゝ。ゝ。二の九ハ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。寄農五百。ゝ。三ハ九。
大江源右衛門。布津村右衛門。堂澤村五。ハ。ゝ。久
右衛ハ者。ゝ。二千五百。引率し。持ハ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。五百。人。
ゝ。馬ハ。掃部。ひさ。ゝ。ゝ。
千。ゝ。論。ハ。津。上津浦村ハ五。村ハ者。ゝ。
大夫野三左衛門。一千。百。ゝ。池尻。中。
安徳。木場ハ者。ゝ。六百。ゝ。ゝ。萩村右衛門。木浦

作左衛門でひきまゝ沼田庄ハ深沢沢石巻天西
よ人とうけうろく持にをこうかゝめ多ん此ハ
大矢野松右衛門山ゝ長谷巻高人よ健民二千よ人
あつけ物ゝ。持にあやゝこゝ海よハ加藤乃
多めれ深人ゆり。さてゝ又軍奉行よハ小沢監物
入道ゝて体意ゝ長ゝ姫ゝて。ゝ塚豊
湯。松鶴ゝ長ゝ布津村代官湯あゝ者ハ玄孫氏
五人ゝ軍ゝ。ゝ中諸事れひや
う宮人よハ上絵村ゝ馬村。ゝ江村布津村田湯
村。深沢ゝ江。ゝ場。千ゝ倫右上津浦下津浦。
大矢野村ゝやうれさいゝ村ゝ。ゝ末民首れ
者ゝ。ゝ二十三人ゝ。ゝ

ゝひやゝちゝれ時帰よハ。ゝ者ゝうちゝ。ゝ
議宮ゝ。ゝ。ゝ二十三人の浜合人ゝ。ゝ使バ
んよハ池田清左右衛つゝ。ゝ津左ゝ湯ゝ。千ゝ倫作左衛つ。
ゝ者ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
後ゝ。義安。杨ゝ右京進之時。ゝ。ゝ人ハ古老のゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
の松大将ハ柳瀬義右衛門。廉子木右馬助。時抜隼人正と
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
せめゝ。ゝ持にゆゝんゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

十二月廿日原城一番攻の事

ちかるる。松くら長門守猪家をさきおとして。
鍋島紀州元茂。同甲州直澄。立花左近忠義
をはじめ其部ちの史忠里。とのゝ御ん方を引率し
て城へ入。よせ手ふせぎ仕ふ。衣笠
それ切りの御用ゆへ。何事もかまはずして。
らゆる城を見捨へハあんの如く遠ざけ次第なり。是
らゆくちさ大ゆ。かうんむこと。ひ
あるべし。そこ用よかゝ。ひとも。ゆ
いだんをとり給ひ。せもしべさていを見せ。あなと
やうれりあり。一和よろんゞ

ハ、ヒとあり〻ぶんぶんとうさんれ板倚月前をり
なり〻せむべきほどあり〻ば諸人をわ食をうち
ぐう〻や。板〻石谷ぐちぐちゆく〻をのく〻ひ
ういぢんをそ張らまをそ〻ぐさてをべさゆく〻あり〻
ざれば。よせまれ軍勢。かぶれをりけれ。大石史夫
あく〻日うぶ道をりうちれども。城中れ屋門ぐち
りけく〻かう〻ゆくれていをもあく〻さ〻ゆ事をもせざ
里をろ。ちうちをて。板よ。松〻長刀れ後陳をり
し。立花左近。ちる兵部ちゆまざきてをのぐみ。
敵城まちく〻ちをりを射ひ〻へりてけもう
ぶく〻ゆむうりゆく〻むゆく〻ちうりんをを〻
張る。ぶらりどよ十二月十九日れうるゆをり。

板〻石谷備將ゆむうけ〻のくまゆ胸ゆるて鷲
兎をを〻うゆ。いつまく〻ゆてうをべさぐ。海
げく夜備勢よ時れく〻ゆをあ者させ。張りけれ
ていをあ〻ち。城中れ屋ゆ〻いをうぐひを
んぐれゆをれをれば強敵ゆさ者。ちう〻
者ゆ小勢をりをを。ゆをうぐ〻れ籠城をれ
ば。ゆんぐゆハ〻ぐ〻ゆををををせゆを〻ぐ〻ん
事。掌板をりゆ宣へば諸將れゆん〻一同ゆく。
を百れ暮ゆをりをれば。ちよ軍勢。夜〻けれて
りをを〻せゆ。をさをれをへをゆをを〻きをば。城中
れをを〻ちらを同時を合せ〻〻ちれまりゆへいて
張をりをを。ちを〻る。板〻内膳。のくまゆふ氏

まく張てハせんとものぎらやう
ゝ
ゝ。軍れせいぎいをぞ
れ人ちゐよ和松山を繁こ
せ。城中れこうどもた
でゐん。こゝゝばれ大
立花人ゝ。ゐいちゞ
れ時ハこゝ忠を和幅
めいゝ。ゐとひふせこ
みゐゝせ。ゐ一ゝりか
幅よ後ゝ十二月廿日こ
一万三千余。りゝりお
松山下か作ゝよ分ゝ。時

せあせんとものぎらやう
ゝ
ゝ。徒ここ。ま門鍋鴻
こせ。こきれこへどゐきこ
大半ハ和のゐへこちゐ
変際ゐるべ。を対
て。こ。よせこ。先
ゐよこ門と。ゐ
戦とも遠ゐかこゐても
ゐ。ゐ。ゐ。

み人数をいざ。大きかりきりひとまて敵ゆまま
きざま。持ってい。ってうり持て。お帰し河則を
まらし。なお。鍋治人。四郎河内こ忠こひと
こ。尼近忠義。支勢五千余騎を勇りこ元
騎竹まに把を行きかこ。ぬれ大まへ雲霞れこ
とくせあよせくに兵一のりみとあ。ぶ。義
のあんよ相遠こて。城中れ角門ぐかはくこ宝こ
こるれば。持に切よこくこ。るこれ丸れ大将
ぶ。大江布津村。堂海ぶ。三千五百撰引ま
ち。宮をせんどく。鬼きさ。ぶれば。義よ多
鑢ふんこを遠きハ。ひ。ちこ
近行敵をい大石あ。こ

てうちけれ鑢ってけ
ちぐ。ぶ。こ城中の。こ。ぶ。ぶ。ぶ

て、人持組頭共八人討死と、そのほか侍共六十九
人ざうひやうかを是、討死ほ員、三百八十余人とそ
きこへし。鍋鴻まよい、強戰よおよばとて、ちかべき
さふらひどもハ、ほ員ハ、鉄夫のほ員を、
ほうりそうり、ささ〳〵ら輕ども、是くを二百余人討
死をとそきこゆ。そのほか方くのそうりら使り
ほさう〳〵ぞちども、三十人討死を拵ら〳〵長州の
ほものもきびをかうの者あり、しぐきこへそう
そ田城中まハ、死人ハ一人をも、ほ員ハ、ほくあり
とうや、是軍ハ勢ハ多ほもよ〳〵ほ、是そう
ほれ暑ハ、遠まよ俵ちとハ、ほものやう
多いたりかぐら城をのらべきまよてけらいま
あ〳〵涙かくせひべき風聞を城中ハ、ほ員ハ、ほ
多り勢ほさふりてそうさんとやぜんどんほ
ほ試攻の意趣ときこへそうきこば、〳〵 うりとき
て、ほ員へそう

鴻原記巻中